

## モンゴル遊牧民候補は夏につくられる

風戸 真理  
北星学園大学短期大学部

### 1. はじめに

モンゴル国では、日本の約 4 倍の面積に約 287 万人 (2012 年現在、以下同様) が暮らしているが、統計的には、その約 66% が都市部に、約 46% が首都ウランバートル市に集中している (NSO: National Statistical Office of Mongolia 2013a: 82-83)。モンゴル国の GDP においては、鉱工業が農林水産業を越えて第 1 位の座を占め (同上: 127)、牧畜を主な生計手段としている者は人口の約 10%にとどまる (同上: 222)。このような状況のもと、モンゴルの遊牧民は近年しばしば、子どもには学歴をつけて都市でホワイトカラーとして就職してもらいたいと語る。では、モンゴルの遊牧は終わるのだろうか？

モンゴルでは 20~21 世紀の激動の社会変化のもと、遊動的な牧畜が、変化しながら続けられてきた。地球上に遊牧の民が生活する乾燥地域は広く、遊牧民を擁する国家は多い。ユーラシアでは、アフリカのサヘルから中国の長城以北地域の多くの地域にまたがる。そのなかで、モンゴル国の社会状況はきわめて特異である。それは、モンゴル国の人口の約 95% がモンゴル系の民族であり (2010 年現在) (同上 2013b)、都市住民・牧畜従事者ともにそのほとんどがモンゴル語を話すモンゴル人であるといえる点にある。つまり、モンゴル国においては、都市と地方に暮らす人びとの差異は民族・言語的なものでなく、生計手段と生活様式の違いである。モンゴルの都市生活者は遊牧民のなかから出てきた人びとなのである。

本稿は、モンゴルの遊牧の何が、どのように変わったのか、そして、現代モンゴルの遊牧民

はどのような生き方を志向しているのかを検討する。具体的には、1910 年代~2013 年に生きてきた、ひとつの親族集団につらなる 26 人の人びとが、草原と都市とにまたがる広い生活空間でどのように暮らしてきたのか、その経験を居所と職業の選択に注目して分析する。そのさい、とくに夏に草原で過ごす時間が人びとの人生におよぼす影響を検討する。

### 2. モンゴルの近代化と学校教育

モンゴルでは、1921 年の人民革命以降の約 100 年間に、近代化・工業化・都市化が進められてきた。そしてモンゴルの遊牧は、1920 年代以降の社会主義的な近代化、1990 年代からの民主化・市場経済化への移行、21 世紀以降の急激な経済発展、という 3 段階の大きな政治・経済的な変化を経験し、その形を変えてきた。

草原では、牧民が移動しながら家畜に草地で採食させる遊動的な牧畜が続けられる一方で、牧民の労働組織と家畜の所有のあり方が変化してきた。1950 年代からは、牧民と家畜が、社会主義的な牧畜協同組合という近代的な組織に組みこまれ (風戸 2006a)、1990 年代には、組合化以前と近いかたちである個人経営に変わった (風戸 2003)。都市では、人びとは学校教育 (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988: 421-425) や兵役 (娜仁格日勒 2010: 148) の経験をとおして、集団的で定住的な生活に自らを慣らしてきた。

近代化にともない、モンゴルの人口は激増した。1935 年に約 74 万人であった人口は、約 80 年間で 4 倍近く増加した (図 1)。増えた人口は労働力として都市に吸収され、都市化が進んだ (小長谷 2003)。モンゴルの都市化率は、1969 年の 44% から、2010 年には 67.9% にはねあがった (Niisleliin zasag dargyn dergedeh statistikiin gazar 2012)。

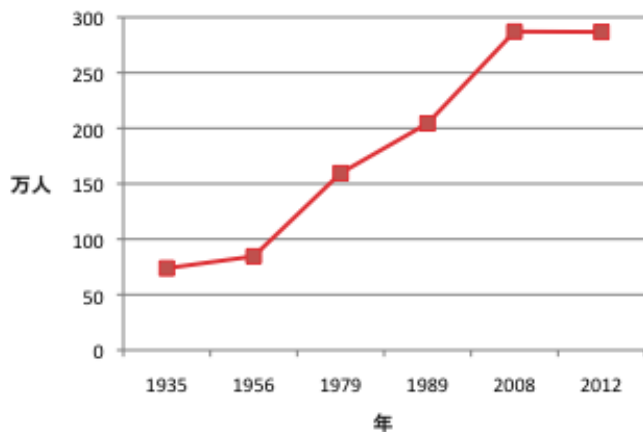


図 1. モンゴル国の人口推移

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/モンゴル人民共和国>より作成)

モンゴル国には都市が 3 つある。首位都市は首都ウランバートル市 (人口 129 万人) であり、これに工業都市ダルハン市 (12 万人) とエルデネト市 (9 万人) が続く。その他の定住区としては、行政区画としての 21 の県があり、それらの県の中心地と、県の下位区分にあたる郡の中心地がある。

地方に暮らす人びとは、家畜を飼育しながら、県や郡の中心地と草原とを行き来している。この移動は子どもの通学を中心とした家族の発展段階に対応していて、短期と長期の 2 つのパターンに分けられる (風戸 2002: 72-73)。短期の移動は季節移動、つまり 1 年のうちで季節によって居所を変えるものであり、長期の移動は世帯の発展サイクルに合わせて、数年のスパンで居所を変えるものである (同上: 73)。

モンゴルの学制は民主化以降、10 年制 (4・4・2 年制) を基本とし、子どもは約 6~16 歳のあいだに無償教育を受ける。これに応じて、子どものいる牧畜家族には原則として、就学前に草原、通学期間には定住区、卒業後に再び草原、という居所選択が必要になる。彼らは、牧畜の経営と子どもの通学という二つ要求を

調整するため、世帯間・世帯内でさまざまな工夫をしてきた。世帯間では、一方が定住区で子どもをケアして通学させ、他方が草原で両家の家畜を預かって飼育するという、預受託による協力がおこなわれている (風戸 2006b: 14)。また、母子あるいは子どもたちだけが定住区で学校に通い、父が単身赴任で、あるいは父母が草原で家畜の世話をするという世帯の分割もみられる (風戸 2002: 70-71)。

### 3. 調査地・調査方法

1910 年代~2013 年に生きてきたひとつの親族集団につらなる 4 世代・26 人の、草原と都市をまたがる移動と生活の経験を分析した。調査は、モンゴル国ボルガン郡とウランバートル市において 2013 年 8~9 月におこなった (図 2)。ボルガン郡は、鉱山都市であるエルデネト市近郊の牧畜地域である。

調査対象はボルガン郡出身・在住の 2I (62 歳、女性) とその拡大家族であり (図 3)、乳児と故人を含む合計 26 人が人生のなかで住んだ場所と従事した活動に関する情報を収集し、これらを世代・ライフステージ・季節の 3 側面から分析した。調査時点では、故人をのぞく 22 人は 5 つの世帯に分かれて、2 世帯がボルガン郡 (草原) に、3 世帯がウランバートル市に本拠地をおいていた。

彼らの居所を、草原 (県や郡の中心地を含む) と都市 (ウランバートル市・ダルハン市・エルデネト市) に分けた。世代は血縁関係によって 4 つに分けた。各世代の人数は、第 1 世代 (1910 年生まれの故人) が 4 人、第 2 世代 (60 代) が 2 人、第 3 世代 (30~40 代) が 8 人、第 4 世代 (0~20 代) が 12 人であった。個人のライフステージは、(1) 子ども期、(2) 学校期、(3) 大学期、(4) 中年期、(5) 定年後、の 5 つに分けた。季節については、モンゴルには四つの季節がある (風戸 1999: 22-35)。「秋・冬・春」

にひとところに、「夏」に別のところにいるパターンがみられたので、この2つに分けた。

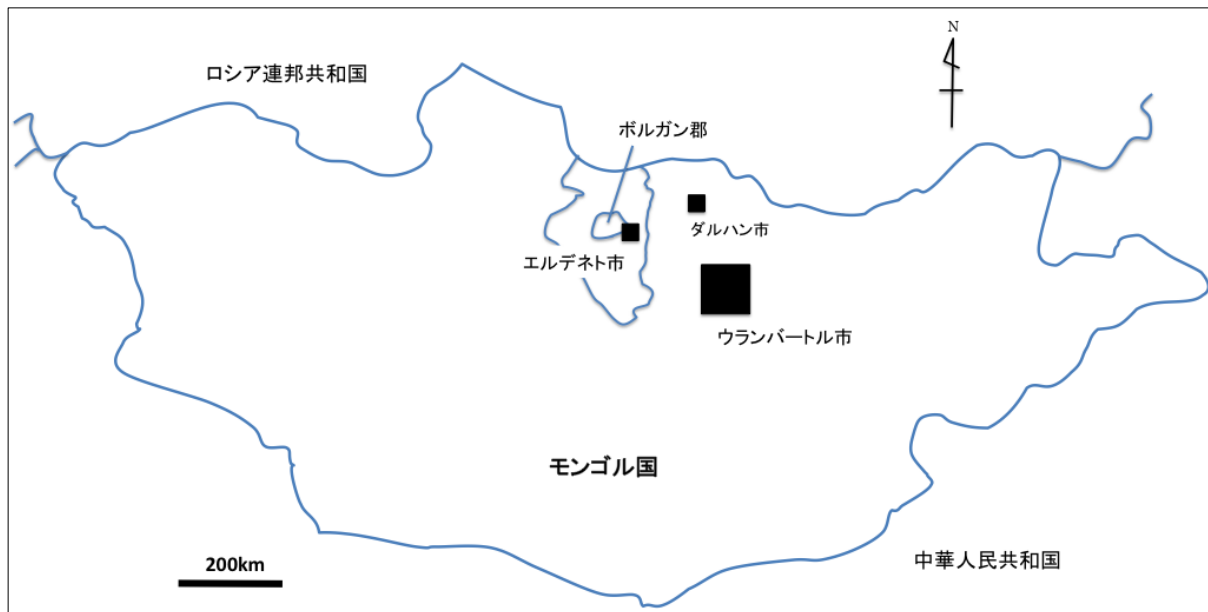


図 2. 調査地

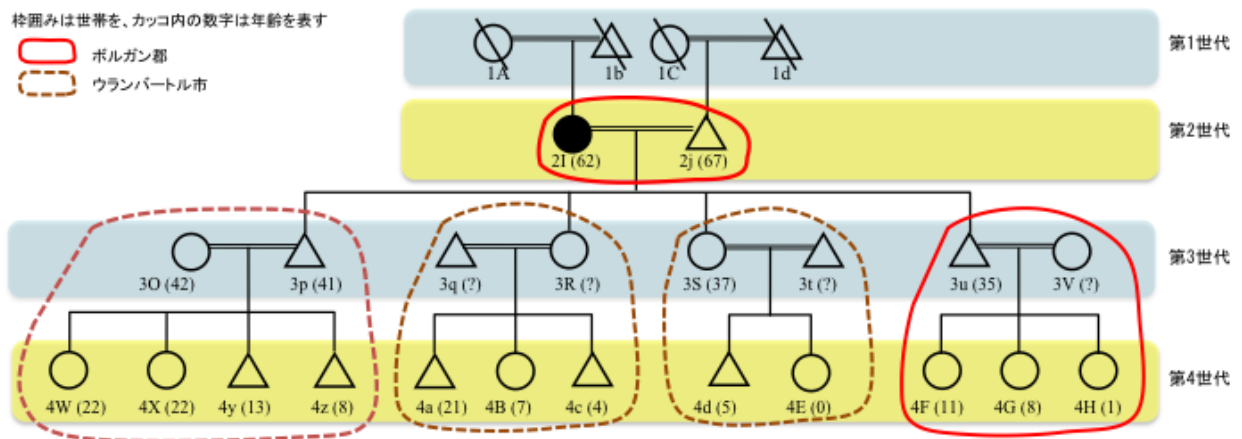


図3 2Iの拡大家族とその本拠地 (風戸 (2014)を改変)

図 3. 2I の拡大家族とその本拠地 (風戸 2014 を改変)

#### 4. 結果

各人のライフステージごと、季節ごとの居所を表1に示す。この表から次の2点が読みとれる。ひとつめに、すべての人が草原と都市の両方に住んだ経験をもつこと、ふたつめに、季節としては夏に草原に滞在する傾向が高いということである。

##### 4.1. 草原と都市の両方で生活する

以下に、草原と都市での生活を、世代・ライフステージ・季節の3つの側面から具体的に示す。まず世代に注目すると、個人記号の一桁目

の数字が世代を表しており、第1・第2世代はライフステージの半分以上の時期を草原で、第3・第4世代は半分以上を都市で過ごしていることがわかる。つぎにライフステージについては、草原で生まれた者は就学・就労・退職をきっかけとして都市に移動し、反対に、都市の学生や労働者は就労や退職を機に牧畜セクターに移動していた。最後に季節であるが、全ての人が草原で過ごした経験を有する季節は、夏であった。

表1. 家族メンバーのライフステージと居所 (風戸 2014 を改変)

No.	個人記号	年齢	居住地									
			(1)子ども期		(2)学校期		(3)大学期		(4)中年期		(5)定年後	
			春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏
1	1 A	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
2	1 b	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
3	1 C	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
4	1 d	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
5	2 I	62	○	○	○	○	■UB	○	■DH/EN	○	○	○
6	2 j	67	○	○	○	○	■UB	○	■DH/EN	○	○	○
7	3 O	42	○	○	○	○	■UB	○	■UB	○	-	-
8	3 p	41	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	-	-
9	3 q	n.d.	■UB	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	■UB	○	-	-
10	3 R	n.d.	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	-	-
11	3 S	37	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	-	-
12	3 t	n.d.	○	○	n.d.	n.d.	■UB	n.d.	■UB	○	-	-
13	3 u	35	■DH	○	■DH	○	■UB	○	○	○	-	-
14	3 V	n.d.	○	○	○	○	■UB	○	○	○	-	-
15	4 W	22	■DH	○	■UB	○	■UB	○	外国	外国	-	-
16	4 X	22	■DH	○	■UB	○	■UB	○	■UB	○	-	-
17	4 y	13	■UB	○	■UB	○	-	-	-	-	-	-
18	4 z	8	■UB	○	■UB	○	-	-	-	-	-	-
19	4 a	21	■UB	○	■UB	○	■UB	○	-	-	-	-
20	4 B	7	■UB	○	■UB	○	-	-	-	-	-	-
21	4 c	4	■UB	○	-	-	-	-	-	-	-	-
22	4 d	5	■UB	○	-	-	-	-	-	-	-	-
23	4 E	0	■UB	○	-	-	-	-	-	-	-	-
24	4 F	11	○	○	■UB	○	-	-	-	-	-	-
25	4 G	8	○	○	■UB	○	-	-	-	-	-	-
26	4 H	1	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-

○草原、■都市

UB: ウランバートル、DR: ダルハン、EN: エルデネト

n.d.: 不明、-: 未経験のライフステージ

## 4.2. ライフステージと居所選択

次に、人びとの居所選択を点数化した(表2)。草原に住んだ季節を+1点、都市および外国に住んだ期間を-1点、不明および外国を0点とした。ライフステージの長さには個人差があるが、おおまかにいえば、第1世代の4人の全人生の居所点は平均+12点であり、草原が強く選好されていたといえる。世代が下がるとポイントは減り、第4世代は-2.8点と都市を選好していた。世代を捨象してライフステージを比較すると、子ども期(+0.7)、学校期(+0.5)、定年後(+2.0)に草原が高く、大学期(-3.0)に都市が選好されていた。季節を比べると、「春・秋・

冬」の平均は-0.9点と算出され、「夏」の合計は1.0点であった。夏にはその他の季節の約2倍、草原が選好されていたといえる。

季節性については、実際の観察からも、人びとが夏休みに草原に集まり、秋以降に都市に移動することが明らかになった。夏休み期間にあたる8月27日から8月31日には、生きているメンバー22人の77%(17人)がボルガン郡に滞在していた。ところが、学校の新学期を翌日にひかえた9月1日にその多くがウランバートル市へ移動し、ボルガン郡に残ったのは36%(8人)であった。

表2. 草原を居所として選好する度合い(風戸2014を改変)

世代	(1)子ども期		(2)学校期		(3)大学期		(4)中年期		(5)定年後		合計	平均
	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏*	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏		
第1世代	12	4	12	4	0	0	12	4	-12	12	48	12
第2世代	6	2	6	2	-6	-6	-6	2	6	6	12	6
第3世代	-6	7	-6	6	-21	6	-12	8	0	0	-18	-2.3
第4世代	-18	12	-24	9	-9	3	-6	0	0	0	-33	-2.8
ライフステージの合計	19		9		-33		2		12		9	
平均	0.7		0.5		-3.0		0.1		2.0		0.3	

\*大学期の夏のみ居所がわからない者(3t)がいるが、大学期の選好度合いを算出す分母は、3tをのぞいた11人とした。

以上をまとめると、2I家族の百年史から次の4つが示された。すなわち、全員が都市生活と草原生活の両方を経験していた。時間との関係では、世代が進むと都市での生活が長くなる傾向があった。個人の人生とライフステージのなかでは、全世代に共通して若年期と年長期に草原に、そして、季節としては夏期に草原に住む傾向がみられた。

## 5. 夏の草原の魅力

ここで、全世代の人びとが体験している夏の草原での生活とはどのようなものなのかを検討する。

最初に、モンゴルの子どものとりまくフォーマル/インフォーマルな社会化環境のあり

方を検討する。モンゴルでは、子どもは3歳頃から祖父母や親戚の家にとりて宿泊・滞在するようになる。大人は他家を訪問したさい、気に入っている子どもに「一緒に行くか」などと言って自宅に誘い、子どもが応じると連れて帰る。初めは1~2泊で帰宅するが、慣れると数週間、長いと養子のように住みこむこともある。このようにモンゴルでは、個人単位の移動とネットワーク的な社会関係の構築が幼児期から奨励され、いわばノマドの早期教育がおこなわれている。

その一環として、都市の子どもは夏に草原の祖父母のもとで過ごす。子どもにとっての草原の魅力として、2I(62歳、女性)は「馬乳酒が飲める」ことをあげる。新鮮な馬乳酒は

夏の草原の醍醐味である。親たちが子どもを草原に送る理由については、4X(22歳、女性)が次のように語った。「草原には家畜がいるので子どもたちは働くことを覚える。そして、空気がきれいで、乳製品が食べられる」。子どもは都市ではパソコンや携帯の画面に向かってぼんやりと過ごすことが多いが、草原で家畜の世話をすると身体と脳が総合的に刺激され、さらには清浄な空気とオーガニックな食べ物が子どもの心身によいというのである。4Xはウランバートル市で働く両親のもとに生まれ、エルデネト市とその近郊の草原で暮らす2I夫婦とその姉のもとで育った。大人にとっての草原の魅力として2Iは、上記に加えて、ゲルに住むことで公共料金・光熱費がかからず、食費の出費も少ないことをあげた。

一方、モンゴル国の初等教育における就学率はほぼ100%である(NSO 2013a: 332)。子どもは就学年齢に達する6~8歳になると定住区に住み、学校に通う。しかしながら、モンゴルの夏休みは6~8月の3カ月間と長く、1年の4分の1にあたる。これを子どもが成人するまでの20年間繰り返すと5年間分の時間になる。

以上をまとめるとモンゴルの子どもたちは、好きな人と過ごす、自然の恵みを享受するといった理由に加えて、学校が長期休暇であるという条件のもとで、草原に集う。彼らは夏の3カ月間に、祖父母をはじめとする年長者たちに生活技術を指導され、また、ふだんは各地に分散しているイトコやその他の親族と出会い、一緒に食事をし、一つのゲルで寝泊まりする共同生活を送る。夏の2Iらのキャンプには、図3に描かれていない遠縁や知人の子どもも加わっていて、夏期学校あるいはサマーキャンプのような印象を受けた。

大人もまた、モンゴルでは夏期休暇を1カ月取得できる職場が多く、夏に草原に「出る」。

モンゴル語で、夏営地への移動ないしは定住区から草原への移動一般を「出る」(*garah*)、冬営地への移動ないしは草原から定住区への移動を「入る」(*oroh*)、その他の方向に移動して居所を定めることを「泊まる、キャンプする」(*buuh*)と表現する。つまりモンゴル人にとって、夏の草原すなわち夏営地への移動には「出る」という語に表現されるような開放感ともなうものなのである。

近年では、地方にも携帯電波のアンテナが設置され、草原にいても携帯電話で都市の用事ができるようになり、夏の草原滞在がしやすくなった。

## 6. 牧畜のライフスタイルと社会関係を経験する

20世紀モンゴルの国家統計と2Iの家族の年史からは、モンゴルの人びとが生活の拠点を草原から都市に移してきたプロセスが読みとれた。しかし、個人のライフコースは都市と地方を往還するものであった。

モンゴルの近代化は都市化に特徴づけられ、統計は、20世紀以降にモンゴルの人口が増加し、草原から都市へ人口が移動してきたことを示している。本研究は、年長世代と比べて若い世代が都市でより長く暮していること、草原の遊牧民が就職・就労・退職を機に都市生活に移ってきたことを明らかにし、モンゴル社会のマクロな変化の実態を実証的に示した。

本研究の人類学的な貢献は、個人に視点をおくことで、統計には表れない、モンゴル人の生き方にかかわる二つの事実をすくいあげたことにある。第一に、モンゴルの人びとは昔も今も、夏になると草原の年長者のもとに集まり、地縁・血縁関係でつながる多くの人びととともに牧畜にたずさわっていた。第二に、都市の労働者・学生が、退職や就労を契機として牧畜セクターに移るといった動きが複数の世代におい

てみられた。夏に、牧畜という生業と草原の社会関係に親しんだ経験があつてこそ、彼らは人生の節目に牧畜を選択することが可能になったのだと考えられる。

夏だけの牧畜体験で本格的就農には足りるのかという疑問があるかもしれない。日本の小中学校では職場体験が、高等教育学校ではインターンシップがおこなわれているが、いずれも短期である。とくに、大学生の企業研修は夏期に多い。これに対してモンゴルの牧畜を、幼児期から通年かつ数年にわたる研修を受けないと参入できない専門職とみなすのはオリエンタリズムなのではないだろうか。本研究には、都市で育ち、大学を卒業した男性(3u)が職業として牧畜を選択し、10年以上経営を続けてきた事例が示されている。

モンゴルの自然環境は厳しいが、それと並んでモンゴルにおいては社会環境の変化が牧民の生活に甚大な影響を与えてきた。予測を超えて変動する自然・社会環境に適応するためには、個人の職業的スキルにとどまらず、知識・労働力・土地、を融通しあえる広範な社会関係が重要である。

実際、人びとは夏に草原の年長者のもとに集まり、自然に埋め込まれた生活に親しみ、牧畜に必要な技術を習得し、地縁・血縁にもとづく社会関係を構築していた。とくに、子ども期の夏の長時間にわたる草原での生活経験は、牧畜というライフスタイルや牧畜地域の社会関係に対する原初的な愛着を形成していると考えられる。夏という季節は、学校教育制度という近代装置のなかに組みこまれた休暇の時間であると同時に、モンゴルのローカルな時間区分における開放の時でもある。現代モンゴルの牧畜社会は、学校の夏期休暇制度を利用して文化の内的論理を次世代に継承しているといえるのである。以上から、モンゴル遊牧民候補は夏の草原でつくられていることが示された。

## 付記

本研究は JSPS 科研費 90452292「生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様性と普遍性」(研究代表: 風戸真理) の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 風戸真理. 1999. 「遊牧民と自然と家畜～遊動と家畜管理～」島崎美代子・長沢孝司編『モンゴルの家族とコミュニティ開発』日本経済評論社. pp. 21-50.
- 2002. 「モンゴル国の地方に暮らす人々の遊牧と定住をめぐる移動と世帯間協力: ドンドゴビ県デレン郡の一家族の生活史を中心に」『リトルワールド研究報告』18: 49-77.
- 2003. 「市場経済へ移行する社会における地方に暮らす人々の適応実践-モンゴル国ドルノト県バヤンドン郡の牧畜制度と教育制度の事例より-」『モンゴル研究』21: 47-67.
- 2006a. 「商品世界からこぼれ出る家畜-社会主義および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性と意味-」『人文学報』93: 25-55.
- 2006b. 「遊牧民の離合集散と世話のやける家畜たち-モンゴル国アルハンガイ県におけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧をめぐる労働の組織化と群れの管理-」『アジア・アフリカ地域研究』6(1): 1-43.
- 2014. 「草原と都市を往還するノマド: 20世紀モンゴル国における居住地と職業選択」楊海英編『中央ユーラシアにおける牧畜文明の変遷と社会主義』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 8. 名古屋大学大学院文学研究科比較人文学研究室.
- 小長谷有紀. 2003. 「モンゴル国における20世紀」小長谷由紀編『国立民族学博物館調査報告』41: 3-6.

モンゴル科学アカデミー歴史研究所編、二木博史、今泉博、岡田和行訳、田中克彦監修 1988[1969]-1. 『モンゴル史 1』田中克彦監修、二木博史、今泉博、岡田和行訳、恒文社。

National Statistical Office of Mongolia. 2013a. *Mongolian Statistical Yearbook 2012*. National Statistical Office of Mongolia, Ulaanbaatar.

–2013b. *Micro Data of Census and Survey*. DDI-MNG-NSO-ENG-PHC-2010-v1.0.

(<http://web.nso.mn/nada/index.php/catalog/89/datafile/F3/V139>)

娜仁格日勒 (Narangerel). 2010. 「1960～1980年代におけるモンゴル人民軍の生活実態—20世紀のモンゴル社会を解説する 1 つの手がかり—」『国立民族学博物館研究報告』35(1): 139–230.

Niisleliin zasag dargyn dergedeh statistikiin gazar. 2012. *Hun am, oron suutsny 2010 ony ulsyn toollogyn negdesen dun*: Ulaanbaatar hot, Ulaanbaatar.

---

## カツオ一本釣漁船団におけるパヤオ（浮魚礁）設置の操業効果 —沖縄島北部地域を事例に

吉村 健司

総合研究大学院大学文化科学研究科

### 1. はじめに

現在、沖縄県を代表する漁業種であるカツオ・マグロ漁ではパヤオと呼ばれる浮魚礁での操業が主流である。パヤオとは海面に敷設した魚類蝟集装置 (FAD: Fish Aggregating Devices) である。パヤオは日本では歴史的に古くから利用されている柴漬やシイラ漬などの漬漁と同様、魚類が漂流物に蝟集する習性を利用した副漁具である。

沖縄におけるパヤオは 1982 年に利用が開始された。その後、全県的に普及し、以降、漁師の間では「確実に獲れる漁場」として歓迎され、漁場として選好されてきた。

パヤオ設置以前におけるカツオ・マグロ漁業では、ソネと呼ばれる海底岩礁や鳥群やサメ付群、流木などを探索し、漁場を決定してきた。漁業におけるパヤオ設置のメリットは漁場探索の労力低減、漁業の効率化などといった点が挙げられる。このようなパヤオの利便性は指摘されてはいるものの、それらはパヤオの特性から語られている傾向にあり、それらの実証的研究が展開されている例はほとんど見られない。

そこで、本稿では沖縄県内でカツオ漁が盛んな地域である本部町で操業を行っていたカツオ一本釣漁船団・第三裕得丸（以下、裕得丸）の漁業日誌からパヤオ設置の操業効果およびその意義を明らかにすることを目的とする。

### 2. カツオ漁の漁場

カツオ漁の漁場は大きく分けて二つある。一つはソネと呼ばれる海底岩礁である。ソネは海底が隆起した地形である。また、鳥の群れやサメ、流木を探索するため、漁場探索に非常に労力を要することが特徴である。もう一つはパヤオである。パヤオは 1982 年に伊良部漁協が初めて設置し、その後、県をはじめ各漁協単位でも設置が進められた。2011 年現在、県設置によるパヤオを除いて 153 基 (13 市町村: 33 基、13 漁協: 120 基) が設置されている。敷設場所は水深 100～2000m、距岸 20 海里以内の海域とされている。特に小型パヤオの設置においては、単独で設置するよりも近接した位置に 3 ヶ所設置することが漁獲効果を高めるとされている。パヤオでの漁獲対象魚種は、カツオ類・マグロ類・カンパチ・シイラ・ツムブリ・カジキ類・アジ類などがある。設置の目的は漁業振興だが、副次的に遊漁や町おこしなどにも期待さ